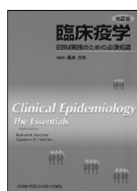


# 臨床疫学

EBM 実践のための必須知識 第2版

Clinical Epidemiology : the essentials,  
4th Edition



監訳：福井次矢

B5 頁272 2006年  
定価 4,935 円(本体 4,700 円+税 5%)  
[ISBN 4-89592-454-8]MEDSI 刊

待望の『臨床疫学』第2版の日本語版が原著の出版(2005年)から間髪を入れず出版された。

フレッチャー夫妻らによる初版は1982年に上梓されたにもかかわらず、聖路加国際病院院長福井次矢先生が佐賀医科大学(当時)時代の総合診療部スタッフと一緒に日本語版を監訳・出版されたのが1999年秋で、その間、10年以上のギャップがあった。草創期の臨床疫学が、統計を使って学会の常識に逆らう新奇な学問程度にしか受け止められなかった当時の出版事情が思い起こされる。

その後、EBMという“標語”とともに、臨床家が臨床の現場で用いる疫学的思考法としての臨床疫学は急速に普及した。昨今、流行語としてのEBMブームが過ぎ去ったことで、一部の医療ジャーナリズムは“EBMはもう終わった”と捉えたが、名郷直樹氏も雑誌のインタビューに答えて

述べていたように、EBMを新奇の目で見える時代が終わったのであって、実は、EBMの考え方は確実にわが国医療界に根付いてきている。

透明性、説明責任が厳しく問われる今日の医療現場では、どのような検査法や治療法であっても、よくデザインされた臨床研究の結果(エビデンス)を示すことなしには受け入れられなくなっている。EBM導入の旗手は「総合診療」関係者であったが、今ではどの専門診療科においても、レセプターや遺伝子にかかわる実験医学的データだけでなく、臨床応用されたときのアウトカムに関するデータを示すことを求められる。

このように一応の普及をみたEBMであるが、標準教科書は?と問われると、残念ながら、誰にでも安心して推奨できる新しい教材がなかった。本書はタイミングよくこのギャップを埋める理想的な教科書といえることができる。また、本書ではこれまで日本語に訳しにくかったITTやNNTなどのいわゆる“EBM用語”が日本語に移し変えられている。やや生硬な語法・表現が後半の章に散見されるが、用語の定着を通じて臨床家の診療態度としてのEBMがさらに普及することを期待したい。

本書を、EBMを学びたい初学者のための標準的教科書としてだけでなく、臨床研究に関心のある実践家のためのレファレンスとしても価値の高い一書としてお勧めする。